会報

昭和四三年二月例会

二月三日（土）午後一時より

於　京都大学文学部第一講義室

藤原宮跡出土の木簡について　　**岸　俊男氏**

藤原宮跡の発掘が進展するに従い、多数の木簡が出土して学界に多くの話題を提供しているが、発掘調査の概況と、出土した木簡についてカラースライドを多数使用しつつ詳細に報告された。

六月例会

六月一日（土）午後一時より

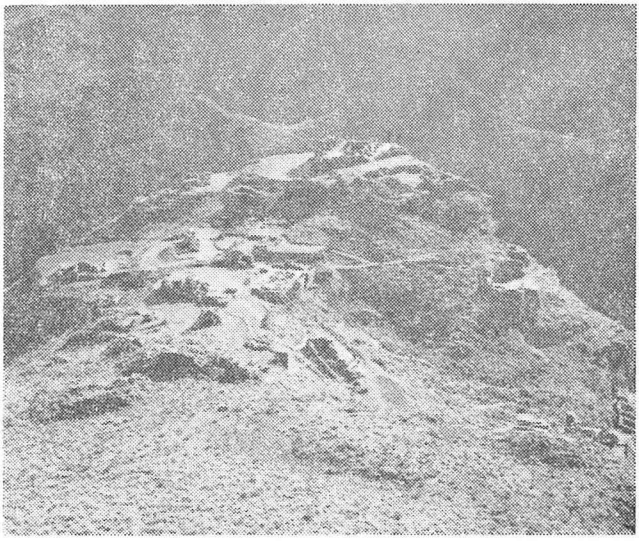
於　京大文学部　第六講義室

第七回京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊報告会

ガンダーラの発掘調査　　**西川　幸治氏**

京都大学第七次イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊は、アフガニスタンとパキスタンの二班に分れ、発掘調査をつづけた。パキスタン班は一九六七年九月末から翌一月上旬まで、パキスタンの西北部マルダン地区、かつてのガンダーラの地で、前半をシャバズガリに宿舎を設け、チャナカ、デーリ、メハサンダ、アソタの三遺跡、後半はパロー・デリーに宿舎を移し、タレリー遺跡の調査をつづけた。

シャバズ・ガリはアショカ王碑文のある地としてよく知られ、カニンガムやフーシエによって宋雲のいう仏沙伏城（洛陽伽藍記巻五）玄奘の跋虜沙城（大唐西域記巻二）に比定されたチャナカデーリはシャバズ・ガリの北二粁にありフーシエによって宋雲のいう白象宮にあてられた地で、一九五九年よりパキスタンにおける主要発掘地点として継続的に調査をつづけてきた。今回は調査未了の北院西北部の調査を終り遺跡の全貌を明らかにすることができた。チャナカ・デリーは中院・北院・西北院から成り、中央院（四〇×五八m）は六柱の間を中心に北と西に小室がならび、北院（一二〇×四七m）は中院の北に広い中庭とその周りに小房がならぶ。北院の西にある西北院（三七×一八m）は大きな構築物の基台である。出土遺物から宗教建築ではなく、クシャン初期の離宮のような世俗建築として構築されたものと推定される。その巨大な石積と強固な基礎工事をもつ建築遺跡はガンダーラ地域でも例をみず、注



タレリー寺院址

目される。

メハサンダ寺院址はシャバズ・ガリの北東、カラマル山塊につづくメハサンダ山の南の尾根に築かれた山寺で一九六一年いらい調査をつづけ今回の僧房群の調査によって遺跡全体の調査を完了した。

アソタのストーン・サークルはシャバズ・ガリからスワビへ向う途中ナワカジでシエヴァ村に向う道をとって北上すると、道路沿いの東にある。ガンダーラ地域には稀で、カシユミルのブルザホームと類似されよう。このストーン・サークルは経約十六米、南東部は石柱が欠け倒壊したものであろう。今回は現状実測と東西の直径方向に巾一mのトレンチを設け試掘した。この予備調査では石柱の構築手法や東の部分で倒壊した石柱の状況を明らかにすることはできたが、出土遺物は殆んどなくその性格は明らかにできなかった。全体の構成と機能の解明は今後の調査をまたなくてはならない。

タレリー寺院址はガンダーラ平野の北縁、スワットに近い山中にひらけた寺院で一九六三年いらい今回まで三度の調査でこのタクティ・バイやジャマルガリー寺院址に匹敵する広大な山寺の中央部の構成を明らかにすることができた。つぎにメハサンダ、タレリー両寺院址の構成について概述したい。

メハサンダ、タレリー寺院址はともに人里をはなれた山間に構築された仏寺である。メハサンダ寺院址は、講堂・厨房、僧房群からなる。塔院は礼拝の対象となった主塔を中心に、その前後左右に奉献小塔が信者によって寄進され、尾根上にひらかれた塔院の基台も拡大した痕跡をのこしている。この塔院のまわりには四面を祠堂がならび、ここには仏像が安置されていた。また主塔の正面につづく参道の階段の両側にも祠堂がならんでいた。階段の踊場にも奉献小塔がみられた。塔院の東と尾根にそう南には会堂、厨房・講堂などの諸室がならぶ。これらは信者とは隔離された僧侶の修行などの日常の生活空間である。ここからさらに尾根ぞいに下へ、また谷をへだてて西には僧房群が点在する。これらの僧房でも塔院に近い僧房群はその生活機能の多くを塔院に近い厨房などの施設に負うているが、塔院からはなれた僧房群ではその生活が完全に独立して行なわれていたことが出土遺物とその量からうかがえる。なお塔院につながる尾根の突端にある僧房には小塔一基がおかれていた。これは僧侶が独自の小塔をもっていたことを示し、塔崇拝の習慣が僧侶の生活にまで根をおろしていたことをものがたり注目される。

タレリー寺院址には三つの塔院がある。西の谷間にひらける塔院は主塔に奉献小塔がならびその三方を祠堂列がとりまき、とくに東の山沿いにならび南へのびる祠堂列は規模も大きく、せり出しドーム状の屋蓋部の保存もよい。この谷間の塔院から東の中央丘へのぼる参道にそうて八小塔とこれを囲む祠堂列からなる小さい塔院がある。中小塔や祠堂は基台下部をのこすのみで保存はきわめてわるかった。中央丘にも塔院がある。この塔院は三つの南北にならぶ大塔と西に小塔群、東と北にならぶ祠堂列からなる。ここで注目すべきは三つの大塔のうち南の大塔で、この大塔は南半が著しく崩壊しているが、北半を精査したところ三つの小塔を覆う形で大塔が建設されたことが判明した。さらにこの南の大塔と連続して北へ二つの大塔が附加されたこともわかった。これは仏塔の増広の過程を示す特殊な例といえよう。この中央丘の塔院の西には厨房、中庭をもちその三面に小房が連続する僧房があり、北のやや低い台地には会堂がたつ。

中央丘や谷間の塔院をかこんで、東にのびた尾根や北から西の山腹には数十の独立した僧房群が点在している。これら僧房の規模は多様で単室、二室から数室構成のものまである。そして塔が増広を重ねたように、僧房もまた、改築と拡大をとげていたことも明らかになた、僧房群にはまた小塔と祠堂が四ヶ所におかれていた。これはメハサンダ寺院址の尾根の先端の僧房のそれと類似するものである。

出土遺物をみると、仏像、仏伝を示す浮彫、建築細部、金具、僧房群から土器片などが多数出土した。仏像片はメハサンダではストゥッコ像がかなり多く、タレリーでは石像が多かった。出土貨幣なども考慮してタレリーを紀元一世紀から四世紀、メハサンダを二世紀後半から五世紀にわたるものと推定できる。

今後、タレリ寺院址の僧房群の調査を継続し、関連するガンダーラの寺院を塔院のみならず僧房群まで調査し、ともすれば遺跡と遊離した彫刻が研究の対象とされがちであったガンダーラ美術や建築を解明し、寺院の構成と変遷のなかに把え、適確に位置づけることに力をつくさなければならない。

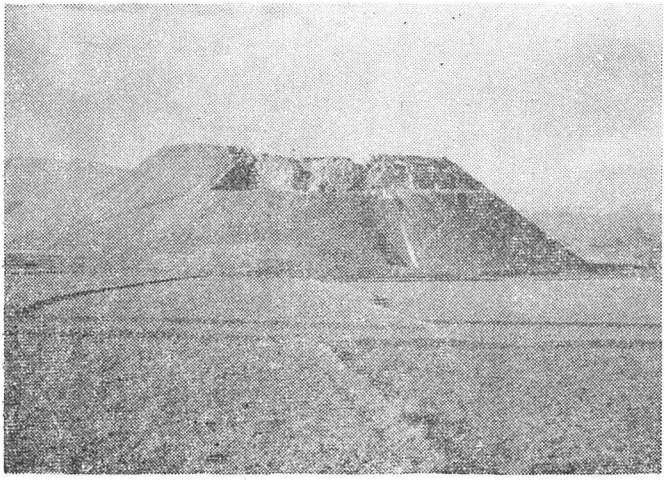
（西川幸治）

チャカラク・テペの発掘　桑山　正進氏

アム・ダリアに流れこむクンドゥズ川の流域には数百にのぼる大小のテペ状遺跡が存在する。チャカラク・テペもそのひとつで、クンドゥズ市の西南一一キロにあり、広大な河岸段丘の麓に位置している。東北から西南に長軸をおいた平面楕円形をなし、長径一五〇メートル、短径一二〇メートルあり、截頂形で大形のテペである。付近には高さ五メートルほどの小さいテペが三つ付属している。

バクトリア南部の仏教寺院については伽藍配置という基礎的な事柄も知られておらず、その一方では仏教時代の遺構があることを示唆する菩薩像や仏伝の浮彫が出土している。しかしそれらは組織的な発掘によってではなく、偶然に発見されたものが多い。

二〇メートルもある高さのチャカラク・テペがストゥーパとそれに伴なう僧坊をかくしているのではないかということが予想されるのは、右の事情とバクトリア踏査との結果である。しかし、このテペの一九六四、六五、六七年の三シーズンの発掘によって明らかになったことは、遺跡は高さ一〇メートルほどの自然丘がもとあり、その上に三時期の建物があいかさなったとい



チヤカラク・テペの遠望

うことである。自然丘直上の遺構は四メートルの厚さの日乾煉瓦積がみとめられるにとどまった。その上の第Ⅱ期建物は非常に残りがよく、家壁の高さは三メートルにも及ぶものがあり、もと漆喰を塗装して壁面をかざっていた。壁の厚さはほぼ一五〇センチでぶあつく、それに仕切られた大小十二の部屋がある。当初の床上には火災のために焼け落ちた太い梁が発見された。火災後には焼け木をとりかたづけることなく、土を入れて床をかため、出入口を閉鎖し、別にあらたに壁を付加して、大改築のあったことを示している。高さ一メートルほどもある甕を多数すえて貯蔵室としたのもこの時期であり、礎石が石臼として利用されていたことも、臼の上石が礎石のそばから必ず出土することによって知られた。第Ⅱ期の建物群は巨大な周壁によって防禦されていた。周壁はテペ頂上の平坦部が急斜面にかわるところ二ヶ所で確認され、東にむいた門もあらわれた。門外の斜面にも建物が存在し、室内には甕がすえられていた。

最後の第Ⅲ期の建物は非常に残りがわるく、建物と建物との相互関係を明確につかめない。しかし、大きく二つの時期を示す遺構に分けることができる。ひとつは日乾煉瓦を積んだ幅一メートルほどの、方角に無関係にたてられた壁が使用された時期。もうひとつは、この壁を埋め立てて全体に一重または二重に日乾煉瓦を敷いた時期である。発掘をはじめるとこの煉瓦敷が至るところでまずあらわれるのである。第Ⅱ期の周壁は、第Ⅲ期では防禦的な機能を果していない。埋没とかなりな崩壊とがこのことを示している。ただ門のみは日乾煉瓦で補修され、天井部は崩壊していたがアーチ状を呈していたらしい。門の部分の床は第Ⅱ期のレベルより約一二〇センチ高まっていて、その上は崩壊土でおおわれていた。

第Ⅰ期から第Ⅲ期まで全体を通じて主流になっていた土器は甕形土器である。口縁部だけをみても時期ごとにわずかずつの差異がみとめられる。その差異により、第Ⅰ期と第Ⅱ期との年代差は第Ⅱ期と第Ⅲ期との年代差より小さいように思われる。いずれの時期にも篦磨きを施したアンフォラ型壺形土器がみられるが、第Ⅱ期においてもっとも整美である。細頸の水瓶も出土した。

とくに重要な点は、建築遺構がまったく宗教的性格を示していないのに、仏教関係の遺物が三点出土したことである。ひとつは石灰岩の仏頭で第Ⅲ期の最後の日乾煉瓦敷が破壊されて深いピットをなしたところから出土。ひとつは頭部を欠いた未成品の禅定仏で、あきらかにストゥーパの荘厳として用いられるはずのものであるが、第Ⅲ期の日乾煉瓦壁の下の堆積中で出土。他のひとつは菩薩像と供養者とが直交する各面におの〳〵浮彫であらわされており、ストゥーパ基壇の隅石であったものが、周壁の外に遺棄されていた。これら三点のすべてが原位置で発見されたのではなく、まったく捨て去られた状態で発見されたということは、おそくとも第Ⅲ期にとって仏教は無関係の宗教であったといえよう。

それ自身に実年代をもっている遺物は貨幣である。第Ⅱ期と第Ⅲ期との間の層からササン朝のバフラーム四世の銅貨が一枚と半片、第Ⅲ期最後の日乾煉瓦敷よりも上でホスロー二世に図文が近い銅貨とアラブ・ササン銅貨が各一枚出土し、さらに同じ層で、中央に方孔のある中国式の銅貨が出土した。ソグド銭の可能性がある。

報告書を作製中である。　（桑山正進）